

はくちょう座神話

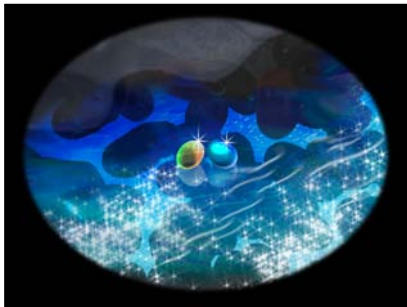
夏の夜空高く、天の川の中に輝く北十字、はくちょう座。

そのくちばしの先に光るふたつの美しい星、二重星アルビレオにまつわる悲しいお話です。

(6分55秒)



1. それは、神と人間がまだお互いに行き来していた頃のことでした。エリダヌス川のほとりで、仲良く遊ぶ二人の少年がいました。一人の少年の名前は、フェートン、そして、もう一人の少年の名はキグナス。フェートンは、兄のように体の弱いキグナスを気遣い、二人はいつも一緒だったのです。



2. ふたりの宝物は川の中で見つけたきれいな二つの小石。黄色い小石はフェートンが、青い小石はキグナスが、それぞれ肌身離さずお守りにしていました。



3. ところが、ある日のこと。いじめられていたキグナスをかばったフェートンは、少年たちから「うそつき」といわれてしまいます。実は、フェートンの父親は、太陽の神アポロンでした。



しかし、それを信じない少年たちは、ことあるごとにフェートンをうそつきよぼわりし、反論するフェートンに「本当なら証拠を見せろ!」とせまっていたのです。とはいえ、証拠などあるはずもありません。



4. 少年たちは立ち去り、あとには、黙り込んだフェートンとキグナスだけが残されました。



5. 「ごめんね、僕のために」あやまるキグナスにフェートンはこう答えました。「君のせいじゃないよ。でも、あんな奴らに馬鹿にされるのはもうたくさんだ!僕は、お父さんの所に行って何か証拠をもらってくる!」

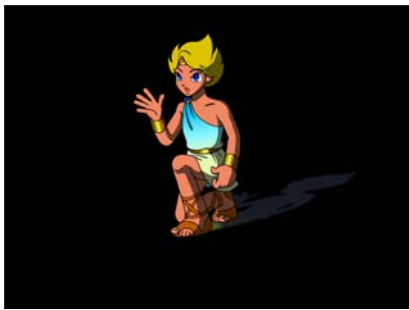


そして、必死で止めるキグナスを振り切って、遠い遠い太陽の神殿へと、向かったのです。



6. それ以来毎朝、キグナスは、東の地平線の果て、朝焼けに光り輝く太陽の神殿を眺めてはフェートンの無事を祈っていました。フェートンがたった一人であんな遠くを目指しているかと思うと、キグナスの胸は張り裂けそうだったのです。

7. 一方、歩き続けて、ようやく太陽の神殿にたどりついたフェートンは、父アポロンに、訪ねてきたわけを話しました。神の子が、うそつきと呼ばれてはアポロンも放ってはおけません。



そこで、「なんでも望みの物を与えるから、それを証拠にすればよい」とフェートンに約束しました。ところが、フェートンは、アポロンの乗る太陽の馬車を貸してほしいと、頼んだのです。



8. 太陽の馬車は、とても少年が乗りこなせるようなものではありません。しかし、神様が嘘をつくわけにもいきません。アポロンは、渋々、1日だけ、馬車を貸すことを承知したのでした。



9. 「あれは、フェートンだ！」その日、いつものように太陽の神殿を眺めていたキグヌスは、躍り出た馬車を操っているのが、フェートンだと、すぐに気がつきました。「ああ、なんてことを…。神様、どうか無事に西の果てにたどり着きますように」



10. しかし、キグヌスの必死の願いもむなしく、馬車が突然、めちゃくちゃな方向へ走り出しました。馬たちが、いつもと違う未熟な乗り手に気づいたのです！



必死に手綱を引くフェートンですが、とても馬たちをおとなしくさせることは出来ません。



太陽の馬車に焼かれて、あちこちから火の手が上がりました。

こうなっては、アポロンも放っておく訳にはいきません。



11. 「許せ!むすこよ!」ピシ!



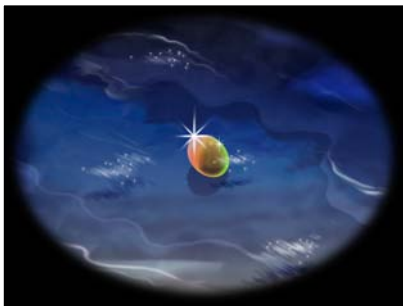
12. フェートンは、一筋の光となって、エリダヌス川に落ちていきました。



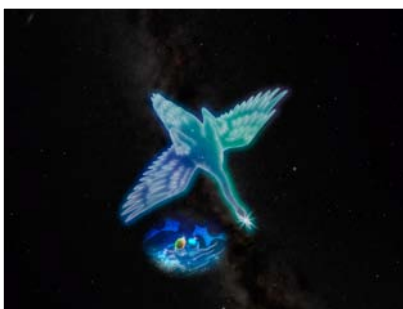
13. 「フェートン!、フェートン!」キグヌスは、川に入って必死にフェートンを探しました。その手に、あの青い小石を握ったまま、もぐっては顔を上げ、辺りを見回し、またもぐり……。



14. いつしか、美しい白鳥に姿を変え、それでも、探し続けるキグヌス。



そして、やっとの事で見つけたのは、水の中にきらめく黄色い小石だけでした。



15. キグヌスは、友情の証の小石をくわえて大空に舞い上がり、はくちょうの星座となりました。今でもキグヌスは、フェートンを探すことをやめません。そして、くちばしには二つの小石が、二人の心を表すように、永遠に美しく輝いているのです。

語り：向殿あさみ 脚本：高島規子 イラスト：塚田洋子 タイトルCG：NOBO 編集：福留政彦